

沖縄におけるアスパラガスのハウス長期どり栽培（2, 3, 4年生株）の適正施肥量と収量

○新里仁克¹・登野盛博^{1,2}（¹ 沖縄農研, ² 沖縄県営農支援課）

【目的】

アスパラガス (*Asparagus officinalis*, L) は新規野菜品目として期待されているが、沖縄は気候や土壌の違いなど県外と異なり、未だ栽培技術が確立されていない。本研究ではハウス長期どり栽培における適正な窒素施肥量を含めた栽培技術について検討した。

【材料及び方法】

品種は西南暖地で主に栽培されている‘ウェルカム’を用いた。2007年3月に播種、5月24日に10.5cmポットに鉢上げした苗を7月12日に畦幅150cm、株間30cmで1条植えた（基肥：N:P₂O₅:K₂O=20:20:20kg/10a、追肥：8～10月まで毎月N:5kg/10a施用。供試土壌はジャーガル。H鋼ハウス）。定植初年目は収穫せず株を養成、2008年2月14日に全刈りし、立茎及び収穫を開始した（2年生株）。2008年12月1日より収穫は終了し株を養成、2009年2月9日に全刈りし、立茎及び収穫を開始した（3年生株）。2009年12月1日より収穫は終了し株を養成、2010年2月10日に全刈りし、立茎及び収穫を開始した（4年生株）。試験規模は1区3.6m²（1.5m×2.4m）で3反復。

試験1：施肥量が収量及び品質に及ぼす影響

2年生株（3, 4年生株同じ）立茎開始後の3月から11月まで窒素施肥量を月当たり①N3区：3kg/10a, ②N5区：5kg/10a, ③N7区：7kg/10a, ④N9区：9kg/10a畦表面に散布し収量及び品質を調査した。

試験2：施肥量が土壌に及ぼす影響

定植後2年目より2ヶ月間隔で深さ30cm（8カ所）の土壌をサンプリングし、NO₃-N、EC及びpHの推移を調査した。

【結果及び考察】

総収量は全ての試験区において3年生株が2年生株を4年生株が3年生株を上回った（図1）。3年間の総可販収量はN9区、N7区、N5区、N3区の順で高かった。A品率は85%以上程度を示した（図2）。太物率は全ての試験区において3年生株が2年生株を4年生株が3年生株を上回った。土壌pHは施肥期間中に下がる傾向があったが、

施肥終了後には再び上昇した（データ略）。土壌中NO₃-N及びECは全刈り前（2月）には各区2年生株が1年前の数値と同等程度であったが、施肥量の多いN9区では3年生株以降、高い値が続いている（データ略）。

以上のことから収量、品質及び土壌分析の結果から、ジャーガル土壌におけるアスパラガス栽培2, 3, 4年生株の月当たりの適正窒素施肥量は7kg/10aであった。熱帯・亜熱帯地域における株の寿命は、寒冷地域にくらべて極端に短くなり、経済栽培は2～3年程度であると言われている。本県の場合はまだ未解明であるので、適正施肥を行い、今後、冬期における株養成方法などについて検討を行い、長期どり栽培の可能性を明らかにして行きたい。

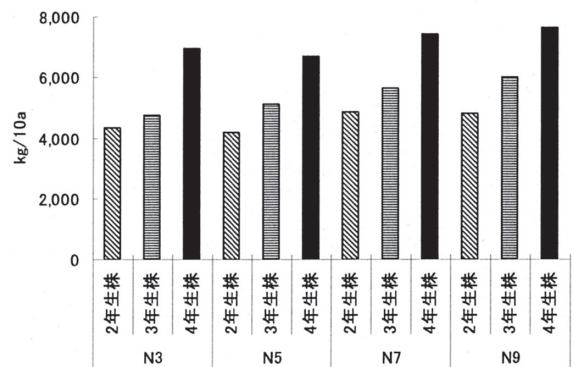


図1 可販果^{*}収量 ※可販果（A品+B品）

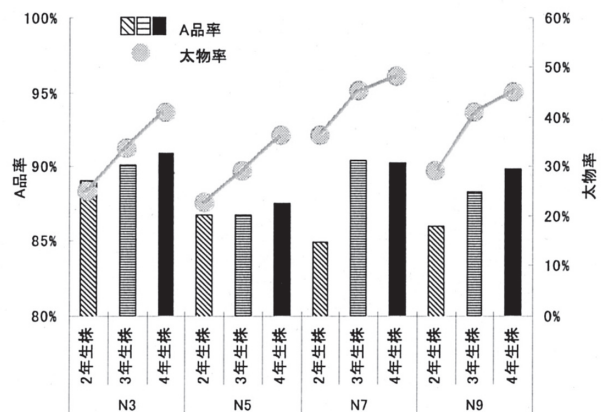


図2 A品率及び太物^{*}率 ※太物（L規格以上）